

# 韓国仏教との出会い

龍善光寺海外留学僧派遣育英会常務理事  
佐藤俊明

## 重い腰をあげて

前々から韓国訪問を勧められていたが、韓国仏教を紹介する資料が入手できなかつたので

“予備知識がなくてはせつかくの訪韓も”、とためらつていた。

いた矢先、第五期生（平成元年度派遣）の韓京洙君（大正大学大学院）が、三泊四日のスケジュールを組んで来て、黒田理事長に訪韓を要請した。

「これでは行かざばなるまい」と、お互いやく訪韓を決意する結果と相成つた次第。

ところが、善光寺海外派遣留学僧のうち、韓国人が五名にも達したので、早晚出かけなくてはなるまいし、何か資料がないものかと思つて

一行は四人。黒田理事長に常任理事の私、それと善光寺青年会会长の山口義男氏。

過去の不幸な歴史的出来事によつて、韓国は

心理的には遠い国となつてゐるが、現実的にはわずか一時間のフライトで行ける。山口氏の即興によると、「機内食、食べ終わつたら、もう金浦」で、国内旅行とかわらない一衣帶水の地である。

金浦空港には今回の旅行の仕掛け人の韓君と第四期生（昭和六三年度派遣）の洪淳海さん、それに第六期生（今年度派遣）陳永裕尼（駒沢大学学院）の実兄陳闡提先生（曹溪宗総務院、宗正司書室長）と、永裕さんの友人の尼僧、雪峰さんと法念さん、計五人が出迎えてくれた。

この五人は、四日間の全日程、私たち四人と行動をともにし、万事万端にわたり心のこもつた奉仕と世話をしてくれた。二人の留学生を除けばこれまで一面識もなかつた言葉の通じない

異国の人たちが、これほどまでに尽くしてくれるとは、まことに有難く感謝にたえないことで、

育英会ならではの感を深くした。

黒田理事長と私は陳室長先生のクルマに便乗、韓君が通訳。駒澤氏と山口氏は雪峰、法念両尼僧さんのクルマに便乗、洪さんが通訳を受け持つという配車区分で四日間をとおした。

第二、第三日は、ソウル——慶州間、往復八

〇〇キロの長旅だつた。全線にわたつて桜が満開で目をたのしませることができた。耳は、といふと、私たちのクルマはむくつけき男性だけだったので歌も出なかつたが、雪峰さんのクルマは、五月に東京・大阪でリサイタルを開いた梵早尼の讃仏歌をテープで流したり、各自が自慢のノドを披露したりして、たいへんにぎやかだつた様子。

来てよかつた

ホテルでチエック・インののち、国立中央博物館に出かけたが、相憎、月曜は休館日だつた



国立中央博物館

ので、すぐとなりの景福宮をみてまわった。

国立中央博物館の外観は日本の国会議事堂と似た感じ。それもそのはずで、この建物は旧大日本帝国が、朝鮮総督府として今から六四年前（一九二六年）に建造したものである。それにしても、朝鮮王朝の王宮のまん前に、豪華絢爛たる王宮の景觀とは全くそぐわない、いや、王宮を威圧するかのごとき、全く異質な建物をよくも建てたものと、旧帝日本の傲岸不礼な振舞いに憤りを感じた。と同時に、明治以後の日本人が、奈良朝以来祖先の心を培つてきた仏教的教養を失わなかつたら、両国の間に氣まずい不幸な関係は起こらなかつたであろうと悔やまれてならない。

私は五十年近く前、軍隊時代、奉天（いまの瀋陽）におつたが、本屋で『奉天三十年』という本を見つけた。これは、スコットランドの医師クリスティーが奉天在住三十年の出来事と個

人的印象を書きしるしたものだが、その中でクリスティーは、日清戦争当時の日本軍は天使のごときものだつたと口をきわめて称賛し、それから十年後の日露戦争のときの日本軍の堕落を中心から慨嘆し、日露戦争後満州に来た日本人はともに語るに足らなかつたと憤激しているのだが、それでも長谷川伸の『日本捕虜志』によると、日露戦争当時の思いやりにみちた捕虜の取扱いの数々の事例や、戦争終結するやまず昨日までの敵ロシア軍将兵の弔魂碑を建て、しかるのち一年有半して味方の忠靈塔を建てるなど、怨親平等のおおらかな奥床しさを示しており、これらは今日の日本では夢想だもできないところである。

韓国の美術をこよなく愛惜した柳宗悦は、当時の朝鮮総督府の文化政策に抗して、韓国に対する同情と悲憤の文章を次々と発表した。景福宮正面にある光化門も、実は破壊されようとしたのだが、それが移転だけで済んだのは柳宗悦の抗議の一文、識者の良識によるものだといわれている。

この一事をもつてしても、いかに無遠慮な無謀な政策であつたかがうかがえる。

こうした思いを抱いて景福宮を見てまわつてみると、僧服の私たちに合掌する幾人かに出会つた。怨親平等、そして増上慢のみじんもない

この敬虔な姿に接し、韓国を訪ねてよかつたとしみじみ感じた。ともあれ、いまのいままで抱いていたモヤモヤが雲散霧消した思いだつた。

雪峰さん

雪峰さんが夕食に招待してくれたので出かけることになった。

「尼さん！」これは誰いうとなしにそう呼ぶようになつた雪峰さんの愛称である。

尼さんは、運転歴一年少々というのに、ひしめくクルマの間を巧みにすり抜けたり、陳先生もときには追随できぬほどのスピードを出した

り、男顔負けの女丈夫である。

女性に齢を問うのは礼を失することなので聞かなかつたが、だいたい四十代の中ごろだろうということだ。これは、写真家として、女性も一個の被写体としてその実像を捉える駒澤氏と、アクセサリーのお店を経営して、アクセサ

リーによつて変貌する女性の虚像を毎日のよう

に観察している山口氏、このおふたりの鑑定だから間違いないところであろう。なぜそんなに

齡にこだわるのかというと、尼さんは八年前に新寺を建立したというからである。すると、三十七、八歳で新寺建立ということになり、現在、弟子が十五人いるということだから、この若さでこれは並大抵のことではない。

新寺建立からはじまつて今日の善光寺を築きあげた黒田理事長であれば、その労苦は人一倍よく知つてゐるだけに尼さんの偉業には感服ひとしおの様子。

「えらいもんだなア」というと、韓君は、「この国では、尼僧さんが寺を建てようと思えば建てるられるんです」と、こともなげにいう。

これはやつかみでも嫌味でもなく、事実そのように見受けられるところに韓国仏教の根強さがあるようだ。

日本の僧侶は下化衆生に力点を置いているが、出家仏教の韓国では当然のことながら上求菩提の修行に励んでいる。そのひたむきな修行一途の姿が信者に大きな感化を与え、帰依の心を培養し、『念すれば花開く』で寺も建つようになるのであろうか。

今日、九旬安居は、日本では修行道場の僧堂でしかおこなわれなくなり、また、第一座として修行僧の先頭に立つべき首座は、今や資格を取るための通過儀礼の一つに過ぎないセレモニーをおこなうだけになつてゐる。しかし韓国では、明治以前の日本でもそうであつたように、多くの寺々で九旬安居が如法におこなわれ、首座は文字通り大衆の第一座たるべき力量を身につけたものがこれにあてられているという。三省させられる点である。

こうして韓君から韓国仏教についての話を聞いてみると、クルマは高級住宅の建ち並ぶ坂を

のぼつている。すると間もなく、ソウルの市街が一望できる丘に出る。その丘の一角に斜面を切り開いて建てられたのが尼さんの寺「祇園精舎」である。

本堂に招じ入れられると、等身大の降魔像が私たちを迎えてくれた。降魔の名にしては優しいご面相のお釈迦様で、いかにも尼僧さんの寺の本尊様らしい。

向かって右の壁には縦三メートル、横四メートルもある『般若心経』のレリーフが掲げてあり、「仏誕」二五一三年壬戌仲秋」とある。仏誕は説により一定してないが、「壬戌」は昭和五七年なので、今から八年前ということがわかる。

本堂より一段下の庫裡に入ると、オンドルのほのかな暖気が冷えた体をやさしくいたわってくれる。

さすがは女性の館である。花祭の季節でもあって、天井には直径二〇センチぐらいの、まん



韓国の精進料理（祇園精舎にて）

まるい蓮灯がずらりとならび、幼稚園の遊戯室に入つたような感じ。その感じを助長させるかのように、壁面に大きな出席表が掲げられてある。「幼稚園を経営してゐるのか?」と思つて訊ねると、それは尼さんの法話への信者の出欠一覧表だつた。

お弟子さんたちが次々にあらわれて歓迎のお拜をしてくる。そして、なづめと二種の薬草を煎したものという甘い湯が出て、次にお茶が出る。これは日本の寺の、梅湯、茶の展待と同じ趣向である。

食事は精進料理で、よくもこれだけの材料を集めたものとおどろくばかり、二十枚近い皿に別々の料理が盛られており、好きなものを自由に取つて食べる食事作法で、韓国の精進料理を美味しく満喫することができた。

デザートは隣室に準備してあり、その席に移ると、年少の五人の弟子、いずれも有髪の中小

学生に幼稚園生が姿をあらわし、横一列に並んで歓迎のお拜をする。みな孤児とのこと。お拜がすむと、われさきにと尼さんの両脇に寄り添う。両手をのばしてかかえ込む尼さんの顔はまさにやさしいおかあちゃんの顔だった。

### 李先生と蔡先生

第一日目の朝、韓君の恩師である李智冠先生を慶国寺に表敬訪問。

慶国寺は、観光案内には載っていない。それ

だけに閑寂なたたずまいの、七五〇年前に創建された名刹である。さきの李承晚大統領は激務の間、政府を抜け出し、独りこの寺に来て、三昧堂で瞑想に耽つたということなので、そうしたエピソードのある有名な寺と知っている人は足を運び入れるであろうが、名刹としては観光客にわざわざされることの少ないありがたい寺の一つであろう。

李智冠先生は、四十代で有名な海印寺の住持となり、ついで東国大学の総長に推された韓国仏教界切っての碩徳であり、つい一ヵ月前、任期満了で総長を辞したばかり。今後は慶国寺住持として韓国仏教界の指導にあたられる由。

前仏教大学の学長蔡澤洙先生が同席、通訳の労をとつてくださった。蔡先生は東京大学で学位をとられただけに、日本仏教学界に親しい知人の多い方であり、思わず話がはずむ。

蔡先生はお茶をすすめてこういわれた。

「このお茶は、白樺木の樹液で点てたものです。その樹液は四月中旬、一週間ぐらいの間にしか採れないものです。ちょうどいい時においでくださいました。これは不老長寿の茶として昔から珍重されております。皆さまのご健勝を祈念します。さア、どうぞ」

不老長寿のお茶をありがたくいただきながら、李先生に、日韓両国仏教界の親善友好の在



李先生（中央）を囲んで話がはずむ

り方についてたずねてみた。

李先生がいわれるには——日韓両国の仏教界はこれまで親密な関係を結んで来た。とくに駒澤大学と東国大学は姉妹校の間柄であり、また大正大学ともごく親しい関係であり、多くの韓国学生が学ばせてもらっている。

また、黒田先生にはとくに五名の若い僧に奨学金を出してもらい、感謝にたえないし、今後もよろしく願いたい。

いまのところ、韓国から日本に出かけて学ぶ者は多いが、日本の僧が韓国に留学する機会が少ない。もつと韓国に来て、学園生活を送るとともに、韓国での生活を通して韓国の仏教にふれてもらいたい。これは親密交流を深めるうえに大切なことである。

東国大学では、日本学研究所を設け、全般的な研究に取り組んでおり、古代韓国仏教と日本仏教の関係についても新聞に連載したが、望み

たいことは日本の大学でも韓国学の研究所を設け、その場限りの交流ではなく、もつと着実に学問的研究を積みあげたいものであり、そういう施設があつたと思う、と。

およそそのようなお話を拝聴し、黒田理事長は日韓佛教界の交流親善に留学僧派遣をとおして微力を尽すことを誓い、一同四人は高麗青磁の逸品をおみやげに頂戴し、蔡先生の案内で諸堂を拝観し、すがすがしい気分で両先生と慶國寺に別れを告げた。

### 仏国寺

二年前のオリンピックが転機をもたらしたのであろう、韓国の急速な経済発展と近代化は目をみはるものがある。その頂点に立つソウルを離れて慶州まで四〇〇キロの旅。高速道路はよく整備され、さほど混んでないので快適なドライブ。海外に出ておどろくのは日本車の多いこ

とだが、ここ韓国だけは全く例外で、ほとんどが国産車である。国威の宣揚にかける国民の意気込みをひしひしと感ずる。

韓国人の勤勉ぶりを目にするにつれ、遊びを美德化しているかのようなマスコミに毒されている今日の日本の姿を思うとき、早晚追い越されてしまうであろうと不安がつのる。

どこもかしこも桜は満開、ハングル文字さえなければ日本国内を走つてゐるかとまごうほどである。東北、北海道で見る樹木が多いが、大樹はほとんど見当たらない。帰国して聞いた話によると、朝鮮動乱の際焼き払われたものとのこと。

× × ×

慶州は「壁のない博物館」といわれるほど、実際に多くの文化遺跡が処々方々に散在し、新羅百年の歴史を今日に伝えており、「慶州を見ずして韓国を語るなかれ」といわれているが、何し

ろ短い日程、明朝はソウルに向けて出立しなくてはならないので、仏国寺以外はすべて割愛せざるを得なかつた。

新羅仏教芸術の精華と謳われる仏国寺は、慶州の中心部から南東へ一五キロ、吐含山の中腹にある。いわば日本の日光にも比すべき慶州随一の名所で、毎日雜踏をきわめる観光寺院である。

駐車場は満車だつたので左に大きく迂回し、書画の展示場前の石段の右傍に二台のクルマを置くに足る空地を見つけ、下車して筋肉のこりをほぐしていると、韓君が、日本人の団体がお詣りに来ている、という情報を耳にして注進してくれた。

「ここでお前と会おうとは思つてなかつた」互いに偶然の出会いをよろこび合つていたが、まさに奇遇というべきか。クルマの置き場所が違つてたらもう会えなかつた。

韓君が前もつて連絡とつてくれていたが、折悪しく、崔月山住職は他出不在で、代わつて梁紫城師が案内に当たつてくれた。

黒田理事長は、「もしかしたら洞外君かも知れない。たしか今日あたり慶州とかいつていた」と呟いていた。すると、石段の上から、私たちを見おろしていた人が歩み寄り、「善光寺さんじを見おろしていた人が歩み寄り、「善光寺さんじ

や、ありませんか。洞外さん来てますよ」という。神奈川B・S・（旅行社）の真川さんだつた。

三浦市三崎の本瑞寺住職洞外文隆師は黒田理事長と駒大同級で、宗議会議員として宗政に参画しているが、檀徒三十数名を引き連れての古寺拝観の旅の途中だつた。

九二年、秀吉の朝鮮出兵の乱で木造建築はほとんど焼かれてしまい、現在の建物はその後数回にわたる大工事により復元されたものといわれる。

何を見ても素晴らしいものばかりだが、石の国韓国ならではの数多い石塔のうち、とくに有名なのがこの仏国寺大雄殿前にならんに向かい合う多宝塔と釈迦塔である。

× × ×

この二つの塔の建立は八世紀半ばといわれ、多宝塔の高さは一〇・四メートル、釈迦塔は八・二メートル。両塔がならんで建つのはご存じ『法華經』に由来するものであるが、その建立につわる哀切な物語りを聞いて私はふと『觀音經』の長行（散文）の最後の部分に出てくる「瓔珞供養」の一段を想い出したのである。

× × ×

この二つの塔は、百濟の石工、阿斯達の作品

といわれる。阿斯達は百濟の家を出て慶州に来て、長い歳月をかけて多宝塔を完成した。それは、一般の常識を破った奇抜な意匠で、空前絶後の名塔として高く評価されている。続いて、簡潔ではあるが優雅な釈迦塔を造りはじめた。

一方、故郷で夫の帰りを一日千秋の思いで待っていた彼の妻は、夫恋しさのあまり、矢も盾もたまらず、夫をたずねてはるばる慶州にやって来た。

たずねて来た美貌の婦人が石工阿斯達の妻だということを聞いた仏国寺の住職は、

「いま、あなたの主人は全精魂を打ち込んで塔を造つております。あと数日もすれば、永遠にこの世で輝く塔ができるかもしれません。しかし、いまあなたが現れると、その精魂があなたにふり向かれて塔の完成に支障があつてはと心配でなりません。せつかく遠くからこられたのに申し訳ないが、塔の完成まで、どこか静かなと

ころでお待ち願えませんか」

と頼んだ。彼女は、住職の話を聞き入れ、塔が完成するときまで、影池のほとりで待つことにした。

その塔が完成すれば塔の影が池に映るという話を聞いた彼女は、毎日やるせない心を慰めるため、影池のほとりにすわり、うつろに水面をみつめていた。

数日が過ぎたが、影池にはなかなかその影があらわれなかつた。そうしたある日の夜だつた、皓々と明るい月が東の空から顔を出した瞬間、水中に白い塔が映つた。それは釈迦塔ではなくて、実は多宝塔だつたのだが、彼女は感激のあまり、「ああ、阿斯達さま！」と、夫の名を呼びながら水中に飛び込んだ。

まさにこのとき、釈迦塔が完成したのだった。阿斯達は、故郷から訪ねて来た妻が、影池で待つているということをはじめて聞き、あたふた

と駆けつけたが、ときすでに遅く、妻は水中に言葉もなく横たわっていた。阿斯達は狂つたよううに妻の名を呼びながら水中に飛び込んだ。

「私は塔に夢中になつて、お前を忘れていたのだ。私はもう絶対にお前のそばを離れないぞ」  
水中に沈みながら阿斯達はそう言つてこと切れだ——という物語である。

さて『觀音經』の「瓔珞供養」のくだりだが、釈尊が説かれた觀音さまの神通無礙なる救世のはたらきに深く感謝した無尽意菩薩は、

「世にも尊きみ仏さま。私は感激と感謝の意をこめて觀音さまに瓔珞（ネックレス）をプレゼントしたいと存じます」

と言い、「どうか、これを受け取つてください」と、首からもろもろの宝珠の瓔珞の価、百千両の黄金に値するものをはずして觀音さまに差し出した。

ところが觀音さまは、せつかくのプレゼント



多宝塔

を受け取らない。

無尽意菩薩は聴衆の代表者（対告衆）である。

そこで、

「これは私一個人のみの気持ではありません。お釈迦さまの法を聴いている一同の気持ちです。どうかみんなの意のあるところを受け取つてください」

と述べた。すると釈尊が、

「無尽意菩薩はじめ、みんなの願いを聞き入れて受け取りなさい」

から

「善哉、善哉、釈迦牟尼世尊、よくこの貴い法華經を大衆のためにお説きくださる。是の如し、是の如し、釈迦牟尼世尊、所説の如きは皆是れ真実なり」という大音声が聞こえる。

そして多宝如来は、

「釈迦牟尼世尊、この座に就きたもうべし」

さて、釈尊に一分を献上したのはわかるが、一分を多宝塔に献上したのはどういうわけか。ここで多宝塔について一言すると、

二五章となつてゐるが、『觀音經』が『法華經』とかかわりを持つのはこのくだりで、その他の部分は独立した經典であるといわれている。

多宝塔のことは『法華經』第一一章の「見宝塔品」に出てゐる。釈尊が『法華經』の貴いことを説いてゐるとき、忽然として大地から多宝仏の舍利を安置した宝塔が湧出し、その塔の中

『觀音經』はご承知のよう『法華經』の第

り、これを釈尊と多宝仏に献ぜられたのは、自分の無礙自在の力はすべて釈尊の教えによるものであるとし、加えて、釈尊の教えの正しさを証明する多宝如来に敬意と感謝の気持ちを表したものである。

「あなたのお父さんは素晴らしい」と、お父さんをほめたたえ、お父さんの真価を証明する人があつたら、あなたも、お父さんに差し上げると同じものをその人にも差し上げる気持ちになるであろう。そのことを考えたら観音さまが釈尊に差し上げたものと同じものを多宝仏塔に献上した意味が理解できるであろう。

そこで釈尊は、

「無尽意よ、觀世音菩薩は、是の如き自在神力有りて、婆娑世界に遊ぶ」と述べられて、長行すなわち散文で書かれた部分が終わるのである。

このように『觀音經』の「瓔珞供養」の一段

を頭に浮かべていると、阿斯達とその妻は、觀音さまが釈迦塔と多宝塔にささげられた衆の宝珠の瓔珞ではなかつたかと思うようになり、それならば觀音さまがおられるはずだ、觀音さまはどこにおられるだろうとみてまわると、一番高い奥まつたところ、この二つの塔を見おろす場所に觀音殿があつて、千手千眼觀世音菩薩がまつられてあつた。私は私の空想が無意味なものでないことを知つてホッとした。

× ×

仏国寺を拝観して感服し、反省させられた点、その一つは、僧堂が七堂伽藍から相当の距離にあって、『觀光』から全く隔離され、森閑としていたことであり、これは日本の觀光寺院は学ぶべきことである。いま一つは、施主のない老僧、寺のない老僧を収容する「定慧寮」と名付ける養老施設があつたことである。現在七十歳以上の老僧五人が収容されていたが、果たして日本

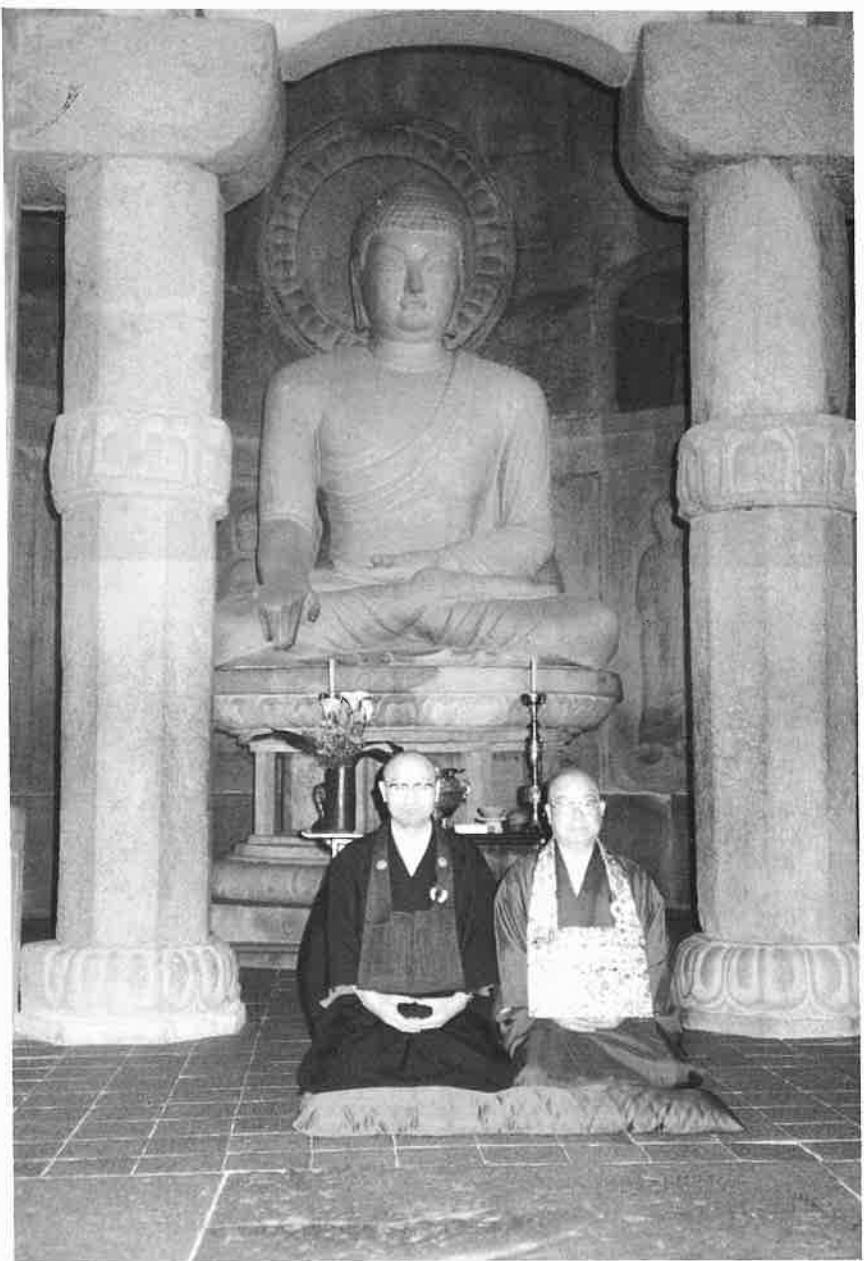
に僧侶だけを収容する養老施設があるだろうか。

× × ×



仏国寺僧堂

仏国寺でいま一つ有名なのは、吐含山中にあ  
る石窟庵の釈迦如来坐像である。私どもが石窟  
庵に出かける頃はもう日暮れ時だつた。さいわ  
い仏国寺のはからいでクルマを通してくれば、参  
拝客のほとんどが下山したあとだつたので、あ  
りがたいことに内部に入つて拝観することがで  
きた。庵内は、前室、扉道、窟室と分かれ、前  
室には八部衆像と金剛力士像が、扉道には四天  
王像が両壁面に彫刻されている。その奥は、花  
崗岩をドーム型に積みあげた窟室になつてお  
り、中央には高さ三・四メートル、幅二・六メ  
ートルの白色花崗岩で造られた釈迦如来坐像が  
ある。微笑の中に威厳と慈悲を併せたたえるも  
ので、東洋第一の傑作として尊ばれている。



石窟庵・釈迦如來坐像

## 海印寺

第三日。前夜出発時刻でもめた。というのは、韓君はソウルに着いてからの日程をこなすため、七時に出発してほしいという。すると駒澤氏は、せっかく慶州に来たのに写真が足りない。これでは『成寿』のグラビアが組めないから、一時間遅らせてほしい。それまでに撮れるだけ撮るから、ということで八時出発となつた。

起床後、道中安全祈願の読経ののち、窓から街を俯瞰すると、駒澤氏が重いカメラ・ケースを担いで足早に移動している姿が見えた。朝食もとらず、たいへんなものだなアと感心した。八時出発、海印寺に向かう。一時に到着。ここでもまた住職が他出不在だった。この寺は韓君が在籍の寺なので韓君と親しい教務部長の無観師が代わって懇切丁寧に案内してくれた。この寺は九世紀初頭の開創といわれ、通度寺が

仏宝の寺、松広寺が僧宝の寺といわれるのに対し、ここは法寶の寺である。八万大藏經という法寶を有するからである。すなわち、一二三六年から一二五一年まで、足かけ一六年かけて彫刻された八一、二五八枚の大藏經版木がここにある。七〇〇余年を経過した今日なお、保存状態がきわめて良好なのは、彫刻、ならびにその保存にいかに細心の注意が払われていたかを物語っている。版木は、ゆがまないよう四隅ごとに銅の板があてがわれており、虫のつくのを防ぐために漆が塗られている。法寶殿は南側と北側に二棟が建ちならんでおり、上から吹きおろす北風と、下から吹き上げる南風の通りを巧みに活用する工夫がこらされ、また地下には木炭が敷きつめられ、温度と湿度が保存にふさわしい状態に保たれているという。

この八万大藏經は、高麗の高宗が、蒙古軍の侵入から逃れて江華島（金浦の西）に都を移し



八万大蔵經

た際、高宗が怨敵退散の祈願をこめて作らせたのもで、のちに江華島からこの寺に移されたもののこと。この寺は数度にわたって戦火に遭っているが、経蔵と版木だけは無傷のまま残っている。仏天の加護というべきであろう。

なお、海印寺は制中（九旬安居）には男僧五〇〇人、尼僧二五〇人が参集、一如に弁道にはげむという。

海印寺の拝観を終わって、海印寺が現在地に移る前にあつた場所に建っている願堂庵に拝登した。ここには「菩薩様」と称される有髪の老婦人が一五名、起居をともに修行しており（制中には三〇名にも達するという）、その菩薩様がたの手料理の昼食を頂戴した。雪峰さんの祇園精舎での場合と同じように、実に多種多様の珍味を満喫させてもらった。これら菩薩様がたは家庭でのつとめを終えた人たちとのことで、私の寺の近くにみる、ゲート・ボールに明け暮れ

てる老婦人とは大きな違いである。

私たちのクルマが見えなくなるまで、合掌して門送してくれたこれら菩薩様がたの姿はまことにすがすがしいものだった。

× × ×

願堂庵を出たのが午後二時、一路ソウルに向かう。旅も三日目で、いささか強行軍だったのでつかれが出て、車中よく眠った。それにしても往復八〇〇キロの運転、陳先生はたいへんだつたろうし、また、韓君は万事に気を配り、こられまたつかれたことであろう。感謝にたえない。

一方、尼さんのクルマはどうなのだろう。時に追い越し、追い越されたりしたが、その際垣間見る車中の様子はなかなかたのしそう。

七時ソウルに着く。ここで尼僧さんがたの仏教生花展に案内された。花祭を記念しての催し

だつたが、一流のホテル、リベラの三階百濟ホールを借り切つての豪勢なもので、尼僧団の底

力を見せつけられたような感じで敬服する。

八時からシェラトン・ホテルの大型レストラ  
ン・シアターで耳目をたのしませながら夕食を  
とる。

おわりに

願堂庵の住職、慧庵老師は海印寺の副住職で  
あり、歯の治療のためソウルに出ておられた。

それで第四日の朝七時、安下所の津寛寺（真觀  
尼のお寺）に老師を表敬訪問し、朝食とともに  
した。

先年、来日されて永平寺拝登の際、黒田理事  
長から便宜をはかつてもらつたことに感謝さ  
れ、時間の経過も忘れて歓談した。

× × ×

以上、三泊四日の短い旅であつたが、陳先生、  
雪峰、法念の二人の尼僧さん、それに韓君と洪  
さんの五人には初中後、すべての面にわたつて

お世話をいただき、また拝観の寺々では心からの歓迎、歓待をいただき感謝にたえず、衷心より厚く御礼申し上げるとともに、これをご縁に今後一層日韓仏教の親善友好に微力を捧げる決意を新たにした。

### 洪さんの得度

洪淳海さんは、昭和六〇年から六三年にかけて、東京大学大学院、宗教学科に留学した。専攻は、仏教における倫理思想。最終年度になつて善光寺海外留学僧派遣育英会を知り、「中道実践の『正』觀に関する一考察」と題する論文を提出し、めでたく入選して第四期生となつた。

この論文は、仏教において、もつとも正しいと重要視したものをして「正」と名付け、その流れについて論及したものであり、思考を行動の基準になる原理、原則としての「正」と、これに伴う実践方途としての「正」とに分けて考察し、

それが一連の流れの中で重層されながら進展する過程を追つたもので、表現に多少難解な点はあるものの、まことにユニークな論文である。

このたび訪韓に際し、しばらくぶりで会つた彼女にその後の活動の状況をたずねると、在俗の一仏教徒に過ぎないため、宗教活動がなかなか思うに任せない様子だつた。そこでいろいろ話し合つた結果、心の支えとして在家得度を受けては、という黒田理事長の言葉を受けて、洪さんもその気になり、来日の機会に、ということになつた。

その機会は案外早く訪れ、得度式は五月一〇日、午後一時より、善光寺釈迦殿においておこなわれた。式典には善光寺関係者十数名のほか、彼女の友人二人が参列した。

仏弟子として生まれ変わるにふさわしく洪さんは純白の韓国の伝統的な民族衣裳を身にまといい、敬虔な態度で式典に臨んだ。



式は年長の故をもつて私が本師となつて進められた。

まず本師が、薰香、洒水して三世十方の諸仏を奉請し、得度の意義を讀える「礼讚文」を誦し、ついで「よい哉洪淳海、世の無常なることを悟り、俗を棄てて仏弟子となる、まことに不思議の縁を思うべし」と、全員が「発心の偈」を唱える。次に得度者は本師の前に進み、頭上に洒水、そして剃刀を受ける。この間全員が、「人生を流轉すれば、恩愛を断つこと難し、恩愛を捨てて悟りに入る、これ眞実の報恩なり」と「剃髪の偈」を唱える。

この洪さんの得度が機縁となつて、韓国から日本への留学僧がふえ、また日本から韓国への留学僧（善光寺育英会では現在一人）がふえ、日韓仏教の親善友好に裨益することがあればと願つて止まない。それだけに正圓明淳尼上座の今後の活躍を期待する次第である。

とし、次に本師の名前の一字「明」と本人の名前の一宇「淳」をとつて「明淳」としたもので

ある。正しく圓<sup>まどか</sup>に、そして明るく淳（きよく）生きて欲しいという願いをこめたものである。

安名授与に続いて、「大いなる哉悟りの服、無相の福田衣なり、如來の教えを身にまとい、ともにもろもろの衆生を渡さん」と「搭袈裟の偈」が唱えられる中、安陀会（絡子）が授与された。

次に十六条の菩薩戒、そして血脉が授けられ、ついで「回向文」「処世界梵」が唱えられ、最後に本師の口宣があつて式は嚴肅莊嚴裡に終了した。

この洪さんの得度が機縁となつて、韓国から日本への留学僧がふえ、また日本から韓国への留学僧（善光寺育英会では現在一人）がふえ、日韓仏教の親善友好に裨益することがあればと願つて止まない。それだけに正圓明淳尼上座の今後の活躍を期待する次第である。